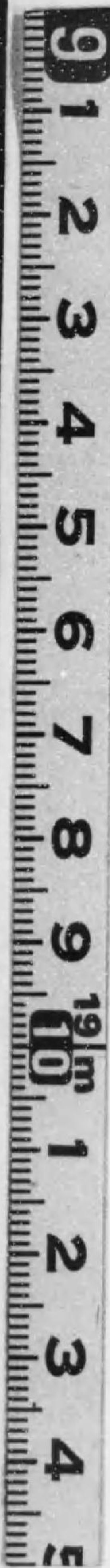


持113

889

加
幾



始



新113
889



ツレ	ワキ	ツレ	後シテ	ツレ	シテ	別
同從者二人	の室 神明 職神	天	別 雷神	同	里	女
右同斷	高砂同斷	〔面〕小面 襟 黒垂 天冠 着附箔 白大口 腰帶 長絹 扇	〔面〕大飛出 襟 赤頭 唐冠(四手付けても) 着附厚板 半切 裕狩衣 腰帶 幣	〔面〕小面 襟 髪 同帶 着附箔 唐織着流し	〔面〕泣増 襟 髪 同帶 着附箔 唐織着流し 水桶	裝
						東
						附
能	脇	種別	茂賀國城山			所
	月		正 六 5 4 7			季

賀茂

内之部卷之十一



賀茂一

解説

始め囃子方座着き、作物矢、舞臺正面先へ出す。
夫より次第にてワキ、同ツレ二人と出で、舞臺に入り向き合ひ諺ふ。

ワキ次郎 『清き水上尋ねてや』 此處引立て、諺ふべし。名宣、道行すべて同断。着詞濟み三人共脇座に行き下に居る。

眞ノ一聲にてシテ、ツレを先に立て出で、橋懸にて向き合ひ、
二人一組 『御手洗や、清き心に澄む水の』 と諺ふ。此の諺ひ方、足取等すべて高砂同断也。二ノ句濟み、二人とも舞臺に入る。

同テヤシ 『なかは行く空水無月のかげふけて』 茲はハツキリ諺ふべし。

二人 『風も涼しき夕浪に』 茲より連吟、調子に心づけて諺ふ。

ワ三 『如何に是成水汲女性に……』 此詞はシテへかゝり諺ふべし。

五 『昔此加茂の里に』 此處より改めて諺ひ、以下の懸合は追々に進み諺ふと知るべし。

七 『石川やせみの小川の清ければ』 初回はハツキリとつけて諺ふ。

八 『汲むや心も潔よき』 此處より氣を變へて諺ひ、以下の懸合も乗り合ひ好く諺ふべし。

九 『誰とはなごや愚也』 此詞はハツキリ諺ひ出し 『汝知らざるや神慮におもむき』 と、かゝつて諺ふ。

十 『恥かしや我が姿』 此處は調子内へ取つて強く諺ひ出し 『異たる神ぞかし』 の邊より追々に位進み諺ふ。中入。來序。シテよりツレと引き、その後より作物幕へ引く。

十一 『感應あれば影向微妙の』 此地追々に進み諺ひ 『有難や』 と、中ノ舞。間濟みて出羽打出し、ツレ(天女)出で、舞臺に入り開き 『荒有難の折からやな』 と諺ふ。

十二 『加茂の山なみみたらしの影』 此地はさらりと諺ひ出し 『山河草木震動して』 の邊より追々進み諺ふ。その後早笛になり、ツレはワキの上に行き下に居る。後シテ、早笛にて出で、舞臺に入り開き諺ふ。

十三 『抑是は』 此處強く諺ふべし。

十四 『荒有難の御事や』 と、舞動キ。

十五 『御祖の神は糺の森に』 此處にてツレ立ち幕へ引く。此前後シテに形種々あれば見計ひ諺ふべし。

加茂

次方

清き水は雲をたぐひて加茂の

宮居るまゝに 甲府 松尾八幡別

室に明神を侍り申す神祇の者也

おも都に於ては當社室に明神

と云ふ所のは事みくはなる共

加

一

おのれをいふ中へさびにたはるるは
まはるるおのれをいふは
まはるるおのれをいふは
まはるるおのれをいふは
まはるるおのれをいふは
まはるるおのれをいふは
まはるるおのれをいふは
まはるるおのれをいふは
まはるるおのれをいふは
まはるるおのれをいふは

おのれをいふ中へさびにたはるるは
まはるるおのれをいふは
まはるるおのれをいふは
まはるるおのれをいふは
まはるるおのれをいふは
まはるるおのれをいふは
まはるるおのれをいふは
まはるるおのれをいふは
まはるるおのれをいふは
まはるるおのれをいふは

加

二

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

室々同非の神職乃人かては

まてをたむなるをたの御座る

深し神の徳由はるるあはれ

らよとせむし神の御徳も

唯汝神の徳ありあかき

あふはるるあはれなる

昔汝かき奉の里に奉の氏か申

申さぬを敬くしあまの御座る

あはれ神ははるるあはれ

汝々の御徳ありてはるる

わくはるるあはれなる

とてはるるあはれなる

とてはるるあはれなる

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines. The script is dense and fluid, with many small dots and flourishes. The lines are roughly parallel and fill most of the page area.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines. The script is dense and fluid, with many small dots and flourishes. The lines are roughly parallel and fill most of the page area.



著作權所有

大正五年四月

四日印刷
九日發行

東京市深川區西平野町一番地

著作者 寶生九

東京市日本橋區通四丁目八番地

發行者 江島伊兵衛

東京市日本橋區通四丁目八番地

發行所 椀屋謠曲書肆

東京市神田區皆川町二番地

印刷者 田村茂太郎



Handwritten text in cursive style, likely a dedication or preface, written vertically on the right page.

終

